

『星を継ぐもの』

ジェイムズ・P・ホーガン著、池央耿訳／東京創元社

SF（サイエンス・フィクション）小説を嗜む諸氏も多いと思うが、「ハードSF」という分野があるのをご存知だろうか？あくまでもフィクションであるから、本当にはあり得ない物語であることは確かなのだが、ストーリーの根幹において科学的な知見や科学的な論理整合性が取れているSFをハードSFと呼んでいる。ファンタジーやスペースオペラも、未来や宇宙を舞台とする点でSFではあるし、壮大だったり爽快だったり夢見心地になったりするが、科学的には矛盾を孕んでいたりと荒唐無稽なものが多い。これに対して、ストーリーの展開そのものにも、登場人物の行動にも、科学的態度が貫かれているのがハードSFである。

アーサー・C・クラークの『2001年宇宙の旅』など古くからハードSFは書かれているが、ここで紹介するジェイムズ・P・ホーガンの『星を継ぐもの』は、その中の金字塔と呼んでも過言ではない。

近未来、月面で真紅の宇宙服を着た人間の遺体が発見される。月面基地には行方不明者もおらず、結局、この遺体は身元不明で「チャーリー」と名付けられる。地球に送って放射性同位元素法で調査したところチャーリーはなんと5万年前に死亡していたことがわかる。チャーリーとは何者なのか？どこから来たのか？この謎に天才的原子物理学者ヴィクター・ハント博士が挑む。これが、この小説のプロローグである。

この後、ハント博士や偏屈な生物学者クリスチャン・ダンチェッカー教授らが謎を解き明かして行くわけだが、この過程が科学のマナーに則っている。すなわち、仮説と検証とを繰返すことによって、謎の核心に迫って行くわけである。もちろん、ある時点で立てた仮説が検証してみたら否定されることもある。また、仮説が正しいことが検証されても、そこから新たな謎が生れたりもする。この小説では、それらの過程が曖昧さや黙示を排除して、論理的に明確に書かれている。さらに、登場人物の生活や行動様式の描写にまで、科学性・論理性が貫かれているのである。

私たちは「技術科学大学」の教員や学生であるからして、当然ながら常に科学的な態度で仕事を進めているわけであるが、取組んでいる問題の困難さに気をとられたり、時間に追われたりして、つい科学的態度が疎かになっている事もある。そんなときに、限りなくやっかいな謎を、その態度を徹底して貫くことによって

解明して行くこの小説は、原則を愚直に守ることの重要性を再認識させてくれる。研究に行き詰まった時に、ぜひ読んでみることをお勧めする。ただし、この小説には、『ガニメデの優しい巨人』、『巨人たちの星』、『内なる宇宙』と続編があり（さらに訳本が出ていないが『Mission To Minerva』も続いている）、読み出すと止まらなくなる可能性があるがあるので、注意が必要である。

執筆者紹介

湯川 高志

電気系准教授。専門領域は、知識処理、テキスト処理、並列コンピューティング。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『星を継ぐもの』 ジェイムズ・P.ホーガン著 池央耿訳 東京創元社（創元SF文庫） 1997年 735円

『ガニメデの優しい巨人』 ジェイムズ・P.ホーガン著 池央耿訳 東京創元社（創元SF文庫） 1981年 777円

『巨人たちの星』 ジェイムズ・P.ホーガン著 池央耿訳 東京創元社（創元SF文庫） 1983年 987円

『内なる宇宙 上・下』 ジェイムズ・P.ホーガン著 池央耿訳 東京創元社（創元SF文庫） 1997年 各882円

『Mission to Minerva』 James P. Hogan著 Baen Books 2005年 2,203円

[ブックガイド目次へ](#)